

「国語科共同授業研究会」報告

望月 善次*

I はじめに

大学・学部と附属学校との共同研究の問題は古くから新しい問題の一つである。その必要性が叫ばれていながら¹⁾ 実態としては、遅々として進展を見せていないのは、よく知られているところである。

我国の教育系大学・学部の中にその原因を探れば、必ずしも世界の大学史の流れを構成員相互の共通認識とすることに十分な努力を払って来たとは為し難い、我国の大学環境において²⁾ とにも角にも自立を果すことを第一義的に考えざるを得なかった歴史的宿命を第一に挙げねばならぬであろう³⁾。

それはさておいて、考察の対象を国語科教育の分野に限定しても、その組織的・継続的な実践・研究は、佐賀大学教育学部国語科などのほんの一握りのものに限定されている。⁴⁾

こうした現状においては、できるだけ多くの大学、学部と附属校が、それぞれの置かれた条件を生かす形で、可能な限り研究・実践の事実を創り出すことが求められるであろう。幼い歩みを始めたばかりの「国語科共同授業研究会」の第一次中間報告を、しかも、報告者の個人的立場から、敢えて行う所以でもある。

II 経過及び内容

1. 学部国語科教室会議決議・各校国語科意向打診〔'80. 4 上中旬〕
教育実習を直接の契機として、学部及び附属小・附属中・仁王小・上田中の国語科教員との、授業研究を中心とした共同授業研究会設立発議。
 2. 設立準備会〔'80. 4. 23(水) p.m. 4:30 ~ 6:30. 国語科教育研究室〕
<出席者>千田直治(附小)・落合修一(附中)吉丸蓉子(仁王小)・八重樫勝・古水一雄(上田中)・野坂幸弘・原田貞義・中村一基・望月善次(学部)
<申し合せ事項>
 - 1) 定例研究会：次の二つを柱とする。
 - 授業研究：授業提供者の授業 VTR 分析研究(撮影担当、望月)
 - 話題提供：学部教員
 - ロ) 各校単位での授業研究会への学部教員参加。
 - ハ) 各校への協力依頼(各学校長を通しての協力依頼)
 - ニ) 初年度の事情考慮
 - 各校・各学部の実情を踏まえ、無理のない形で行う。
 - 各校一巡計4回を年間の最低目安とする。
 - 会終了後の懇親会等相互の交流をはかる。
- ※以下、本報告は 1) 定例研究会を中心とする。
3. 第1回研究会〔'80. 5. 30(金) p.m.4:00

* 岩手大学教育学部国語科

～7:00, 於教育工学センター授業分析室]

<話題提供>原田貞義(学部):「上代文学会」(於甲南女子大学)参加に伴う, 最近の研究動向所感。

<授業研究>(VTR)提供者 三浦洋二('80. 5. 27(水) 附中2C, 谷川俊太郎「はる」)

<出席者>落合修一・照井 健・三浦洋二(附中)・柴田禮司・古水一雄(上田中)・吉丸蓉子・前川清志・横沢幹雄(仁王小)・倉島敬治・原田貞義・彦坂佳宣・中村一基・望月善次(学部)

4. 第2回研究会['80. 7. 4(金) p.m. 4:30～7:00, 於教育工学センター授業分析室]

<話題提供>野坂幸弘(学部):岡松和夫『詩の季節』をめぐって

<授業研究(VTR)>提供者 柴田禮司('80. 6. 25(水), 上田中1年5組, 日浦勇「カプトムシのいるところ」—教育出版1年—)

<出席者>落合修一・三浦洋二(附中)・柴田禮司・佐藤富貴子(上田中)・吉丸蓉子(仁王小)・野坂幸弘・彦坂佳宣・中村一基・望月善次(学部)

5. 第3回研究会['80. 11. 28(金) p.m. 4:30～7:30, 於教育工学センター授業分析室]

<話題>本年度の教育実習(各校)

<授業研究(VTR)>提供者 高橋 繁('80. 11. 28(金), 附小3年つっじ, 中国の民話=君島久子訳, 「ふえをふく岩」—教育出版, 小3下—)

<出席者>柴田禮司・古水一雄(上田中)・高橋繁(附小)・前川清志・横沢幹雄(仁王小)・彦坂佳宣・中村一基・望月善次(学部)

6. 第4回研究会=予定['80. 2. 13(金) p.m. 4:30～7:00, 於教育工学センター授業分析室]

<話題提供者>彦坂佳宣(学部)

<授業研究(VTR)>提供予定校 仁王小

III おわりに

「国語科共同授業研究会」は, 漸く歩き出した

ばかりである。ほぼ一年を終らんとして, 当初予定していた最低線である「4回, 各校一巡」の線には, どうやら届きそうである。それでも, 各校各人が, それぞれの場において色々なやりくりをした結果である。特に附属等各校教官の多忙さは学部教官の予想を上廻るものであった。そうした多忙さを, 少なくとも以前よりは実感できる様になったのも, 研究会より教えられたことである。

会は今, 年間を通じてのテーマ設定, 役割分担の話し合いへと進もうとしている。会のなかった以前より少しは意志の疎通も進んだ様に思われる。当初の申し合せのごとく懇親会をほぼ忠実(?)にもっていることや, 先にも述べたごとく, 本報告においては, その具体的言及を省略してあるが, 定例研究会以外の, 主として各校を単位とする研究会への学部教官参加が, その具体的形である。

しかし, 我々の踏み出したものは, あくまでも最初の一步であり, 半歩であるにすぎないのも, また事実である。一例を, この研究会をもつ直接の契機となった教育実習の問題からひこう。例えば, 大学・学部と附属校間における基本問題の一つである「指導内容と互いの分担区分」というような問題⁵⁾一つを挙げてみても, ほとんど手がついていないのが現状であり, これからなさねばならぬことの多さを知らされるのである。

繰り返す様ではあるが, とにも角にも会はスタートした。各校の校長・副校長をはじめとする職員各位のバックアップ, ビデオ撮り, 会場提供をはじめとする物心両面にわたる教育工学センターのサービス, (敢えて我が田に水を引く様なことを言えば) わが国語科のチームワーク等いくつかの好条件に恵れて会はスタートした。今しばらくの間は, 何としても会を継続させて行くことが第一に求められることであろう。そしてそのことがとりも直さず巨視的にも意味をもちうる現状にあることは「はじめに」において記した通りである。

1) 例えば, 日本教育大学協会が, その『会報』に,

「大学・学部と附属学校の共同研究シリーズ」なる欄を設定しているのもその一証左といえるであろう。

(第38号—1979.6—以降)

- 2) Hofstadler and Metzger: "Development of Academic Freedom in the United States", 1955, ホフスタッター, メッガー (井門富二夫他訳) 『学問の自由の歴史』(上)(下) (東大出版会, 1980).

井門富二夫「新構想大のルーツを求めて—教育と研究の分離—」<『IDE—現代の高等教育』No.206 (民主教育協会, 1980-1) pp.41~49>

- 3) 津留 宏『教員養成論』(有斐閣, 1978) pp.81~92.

古谷庫造「大学・学部と附属学校の関係について」<『会報』第37号 (日本教育大学協会 1977-12 p.4)>

- 4) 白石寿文「学部・附属の共同研究体制のあり方を求めて—佐賀大学教育学部国語科のばあい」<全国大学国語教育学会編『国語科教育』第27集, (学芸図書, 1980-3) pp.44~51.>

小沢俊郎『共同学習 蛙の詩三篇』(筑摩書房, 1980).

- 5) 教育実習指導研究会編『教育実習指導資料』(表現社, 1969) pp.51~66.

岩井勇児他「教育実習・事前指導に関する教師と学生の意識」<愛知教育大学教育実習・事前指導改善研究会『教育実習・事前指導改善に関する研究。研究報告書』第1号, (1977-3) pp.36~42>